

## 論文の内容の要旨

論文題目 工房の秘密を求めて——ダンテへダンテから——  
氏名 浦 一章

論文『工房の秘密を求めて——ダンテへダンテから』の目的は、その表題が示唆するように、ダンテの創作活動を器用な「手仕事」になぞらえて、その作業の際に活用された「資材」（とりわけ先行する伝統から与えられた素材）を明らかにし、可能な場合には「資材」として活用されたものをダンテがどのように変容したかを解明することにある。副題とした「ダンテへダンテから」は伝統がダンテを中継点にしていかに受け継がれたかを、本論文の射程に含めようと努めたことを示している。密接に関連した第1部と第2部はともに『キタ・ノワ』を主たる分析対象として、先行する伝統（＝「潜在的な書物」）からの借用（＝「引用」）という観点からダンテの「手仕事」の実態を捉えようとしている。これに対して、第3部はダンテ以降のある詩人（年代的にも文化的にも、ダンテとは大きく異なる作家）と比較することによって、ダンテが伝統（キリスト教思想のそれ）において占めている位置を明確化し、キリスト教教理に対してダンテが示す姿勢の特徴を捉えようとしている。第4部は先行3部の議論の理解に資したり、そこで扱われている議論のさらなる広がりを示すのに役立つと思われる小論を集めたものである。

第1部「構造と引用——『キタ・ノワ』をめぐる」は、見出しにも含まれている初期ダンテの作品、第3章の成立過程を明らかにし、それを基礎に『キタ・ノワ』を全体としていかに解釈すべきか論じている。『キタ・ノワ』はベアトリーチェの1周忌にあたる1291年6月8日以降、90年代の前半に書かれたと考えられる作品であるが、日本の「歌物語」のように、韻文＋散文の混合形式をとっている。重要な例外がないわけではないが、大概はすでにさまざまな機会に詠まれストックされていた韻文作品に、散文で解説を付し、歌が詠まれた背景と歌の作りを明かしながら章を構成し、そのような章を年代記風に緩やかに結合しながら筋を展開してゆくのが『キタ・ノワ』である。第1部（とりわけ第5章）の考察は過去（韻文が担っている過去）を変容する物語の散文の役割を再評価することを目指しているが、『キタ・ノワ』の章分けを見直すことによって散文の物語性をより明確にできるのではないかと考えて、この件に関する1990年代アメリカおよびイタリアの動向を考慮しながら、新たな章分けを試みているのが第1章である。第2章は『キタ・ノワ』を先行する伝統的なトポスとの関連で読み解くという方法論を、それ自体トポスのひとつである「記憶の書」から引き出し、また「材源」の概念について

考察している。上に述べたように、『キタ・ノワ』第3章も、すでに書かれてしまっていたソネットに後から散文解説を添えることによって成立したと考えられるが、本論文第3章はソネットが散文によって『キタ・ノワ』の構想と結びつけられる以前は、いかに読まれえたかを、「喰られる心臓」というトポスの関連で論じている。これに対して、ソネットが『キタ・ノワ』の構想と結びつけられる際に媒介の役割を果たしたトポスが「予兆をもたらす夢」であったと論じているのが本論文第4章である。第3、第4章の考察はソネットが詠まれた当初の意図と『キタ・ノワ』の構想の間に存在する大きな隔たりを明らかにし、過去の意味を大胆に変容してしまうダンテの「手仕事」の意識的操作性を浮かび上がらせる。その成果を反映させながら『キタ・ノワ』を作品としていかに読み解くべきかを論じているのが第5章であるが、言うまでもなく、ダンテによる過去の意識的変容という事実を積極的にとり込まない作品論は説得力に乏しく、しかるべく批判されることになる。『饗宴』や『神曲』など『キタ・ノワ』以降に書かれた作品との関連を視野に含めながらも、後続の作品の立場を先行作品に投影することなく、『キタ・ノワ』はそれ独自の視点から読まれるべきだと主張するのが第5章であるが、創作家としてのダンテ個性ひいては全体としてのダンテ像に関する提案をも含んでいる。第1部は、第1章を除いて、かつて『ダンテ研究 I —Vita Nuova, 構造と引用—』(東京, 東信堂, 1994年)として刊行した論考から成り立っているが、主張の基本線は変更なく保ちながらも、細部は大幅に見直し、情報の補足も(概ね註に織り込む形で)少なからず行なった。イタリア語では「心」も「心臓」も同じ“cuore”という単語で表わされるが、「心」を「心臓」と置き換えることによって、詩のメッセージを視覚的・演劇的に表現していると思われるさまざまな図像には、とくに注意を傾け補足した。「心臓」を「心」に置き換える逆の手順によって、「心臓を喰らう」というトポスが含みもつ寓意解釈の可能性が見えてくるが、そのことと関連づけられるべきであろう。

第1部が「詩片」と物語の「散文」が絡まり合いながら『キタ・ノワ』を織りなしてゆく過程を主題とし、その過程に介在した伝統的要素を捉えようとしているのに対して、第2部『「記憶の書」を繙きながら——先行恋愛詩から学ばれたもの』は、むしろ、「詩片」の成立を主題とし、「詩片」の中に編み込まれている伝統的要素を把握しようとしている。第6章は第1部の考察の結果を簡略にまとめ、『キタ・ノワ』の一人称語りの「私」が伝統に強く縛られ、むしろ典型的な価値を帯びていることを指摘し(「私」は、逆説的にも、あまり「個人的」な内面を開示しない)、そのような「私」の言説としての「詩片」を第1部と同じ方法で分析することの必要を論じている。それゆえ、第6章は第1部と第2部の後続の諸章との橋渡しの役割を担っている。第7、第8、第9章は、ダンテの創作の場と伝統との関連を、基本的にジャコモ・ダ・レンティーニ—ダンテ(—ダンテ以降)という図式で把握しようとしており、互いに密接に結びつきながら、ダンテの材源としてのジャコモの重要性は、たとえダンテ自身がジャコモを凌駕したと宣言して憚らなかったとしても、決して軽視されるべきではないことを明らかにしている。第7章はジャコモが事実上の創始者と考えざるをえない押韻語の組をダンテがいかに活用したかを主たる問題として扱っている。第8章はその押韻語の組やダンテに刻印を残していったその他の要素がジャコモの30数篇からなる作品群の中にいかなるマクロテクスチュアルな結びつきを生みだすかをたどっている。その結果、「詩片」を連結して物語を織りなすヒントをダンテがジャコモから得た可能性とともに、ジャコモ自身が編んだかもしれない自作アンソロジーの輪郭が浮かび上がってくる。第9章1節は、アンドレアス・カペラヌスからジャコモをへて『フィローコロ』のボッカッチョへと受け継がれてゆく「恋愛評定」(questioni d'amore)の1つに、これまで全く指摘されてこなかった初期ダンテが関連していることを明らかにしている。これに対して、同章第2節はダンテが大きな影響を受けたと公言しているグイド・グイニツェッリがその実ジャコモの「詩法」の強い刻印を受けていることを指摘している。第10章は、ダンテの創作の場と伝統との関連をアルナウト・ダニエル—ダンテ—ペトラルカという線に沿って捉えようとしているが、『キタ・ノワ』に収録された「詩片」とはさまざまな意味で対照的な性格を帯びたセステーナを主たる分析対象とし、比較を通じてダンテとペトラルカの文体の違いを明確化している。

第3部「境界線を挟んで」は、人知の限界をめぐって、ふたりの詩人(ダンテとブレイク)がいかに異なった態度をとったかを解明し、ダンテとは正反対の見解をもつブレイクが、にもかかわらず、ダンテ

に共感を抱きえた点はどこにあったのかを探求している(第 11 章)。この問題にはキリスト教徒が「好奇心」と呼ぶところのものが関連しているが、人知の限界を越えた「好奇心」に対する戒めを含んだ『水陸論』も、ダンテの立場を明らかにするものとして第 3 部に含まれている(第 13 章)。「地獄篇」第 26 歌に描かれたウリクセースがダンテ自身の「否定的分身」であるなら、ダンテとは正反対の見解をもつブレイクをウリクセースに重ね合わせる可能性も垣間見えてこよう(第 12 章)。ダンテ研究の契機をあたえてくれたのがほかならぬブレイクであったが、筆者のダンテ研究のもっとも古い核を含んでいるのが第 3 部である。

第 4 部「補論集」は、ダンテ理解に役立ち、ある程度学術的な性格も帯びている 3 つの小論とボッカッチョに関する 1 章から成り立っている。第 14 章は、第 1、第 2 部ではほとんど触れられていないダンテの伝記に関する若干の補足である。グイド・カヴァルカンティ(第 1 部で頻繁に話題とされ、第 9 章 2 節でも触れられている)とダンテの関係についての、いささかの補足情報となってくれるよう期待する。第 15 章はダンテ受容の問題と関連した論考であるが、文学史の見方にも少なからぬ影響をあたえた「巨人」ダンテの発言は、第 9 章 2 節の考察が示唆するように、再検討に付されねばならない。第 16 章は、古典作家に対するアプローチの違いからダンテとペトラルカを分ける約一世代の意味を考察しているが、「ルネサンス」あるいは「人文主義」の問題をめぐって、第 12 章の議論と緩やかに連結している。第 17 章は、『デカメロン』第 39 話とその材源をめぐる比較考察であるが、本書第 3 章 3 節 2 の議論への一種の補註という性格を帯びている。